



三浦哲郎短篇小說全集

第一卷

講談社

三浦哲郎短篇小説全集 第一卷

昭和五十二年九月十六日 第一刷発行

著 者 三浦哲郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一―二

電話東京〇三九四五―二二二（代電）／振替東京八―三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定 価 二八〇〇円



落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

© Tetsuo Miura 1977, Printed in Japan

目次

初期短篇 I	9
十五歳の周囲	35
幻燈畫集	64
忍ぶ川	106
初夜	129
恥の譜	154
鰻の文鎮	170
ある外套の話	193
おふくろの妙薬	202
妻の橋	

初期短篇Ⅱ

村の災難

233

射撃

266

草の宴

287

乳房

322

聖夜

341

地震

356

冬の狐火

372

揺籃のころ——文学的自叙伝 1

410

解題

427

装
幀
司
修

三浦哲郎短篇小説全集 第一卷

初期短篇

I

十五歳の周囲

たった一度だけ、遺書を書いた経験があります。しかし、自殺のためではない。殺される危険を、予感したからです。それは大げさだ。無自覚のまま、不意にあの世へ持って行かれる頼りなさから、と言い直してもいい。

十五の夏でありました。

あけがた、ひどい地響きに夢をやぶられ、地震かしら。起き上って窓を開けたとたん、つい目の前の上空を、黒光りする塊がごうぜんと矢のようによこぎりしました。それはすぐ近所のビルのかげにきえたが、私の眼底にはその塊の腹に描かれた白い星のマークが、あざやかにのこりました。私はいきなり寝巻の裾をからげて窓をのり越え、トタン屋根をはい降りて塀をつたい、中庭にとび下りて防空壕の中へかけ込みました。壕の中はまっくらやみで足もとが見えず、いきおいあまっていちばん奥の板壁に身体ごとつき当り、私はなんとなくなれたらを踏んだが、とっさに入口から身をのり出し、空襲だよ、待避、待避、と母屋の方へ叫びました。叫んだのですが、声がのどにくっついた。終戦一と月ほど前のことでした。

そのころ、私は離れの二階に、ひとり起居していました。勉強にうち込むためです。私は海軍士官になる準備に没頭していました。私の目ざす学校は、瀬戸内海の或る小島にあるはずでした。見たこともないその小島の風景を、私は夢で二、三度遠望したことがある。緑したたる島山に、ちかちかと白くひかる校舎がそびえ、その屋上に、どういふものか、赤白だんだらの大きな吹き流しが、ゆったりと潮風になびいているのでした。これはおそらく、頭の中でくみ立てた想像と、実際に見覚えのある飛行場の遠景とが、重複していたのでしょう。あの学校を卒業したら、と、私は夢みていました。飛行機乗りになつてやろう。ちいさな飛行機を駆つて、敵の軍艦の煙突の中へひと思ひに飛び込んでやろう。

はじめから、死ぬ気でいたのです。やたらに、私は死にたがつていました。物心ついてから、立派に死ぬことだけを教えられて来た。死ぬ時機が近づいていることに、私は胸をとどろかせていました。死ぬことが、ちつともこわくなかったのです。

夜、寢床の中で、私は目をつむつて、死にぎわの空想にふけりました。それは、血躍る、爽快きわまる、あざやかな空想でありました。雲の上から、私は敵艦めがけて突つ込むだろう。霧。はれて、青い海。笹舟。玩具の軍艦。風圧。落ちる落ちる。花火。白い花。花火。白い花。ボンボン蒸汽。耳の中でサイレンが。ふくれるふくれる。軍艦。白い煙。黒い煙。あ、噴火口。赤い風。閃光チカリ——そこで、私の臉のうらを、白い花片はなびらのようなものが雪のように降りました。それは桜の花びらのようであつた。しかし、灰のようでもありました。すると、きまつて、ウミユカバミヅクカバネ、という歌が身体の中のどこからかきこえて来るのです。当時、その歌をきくと、感きわまつて、かならず私は泣きました。それから、空気みたいに軽くなって、ふんわりと眠りに落ちて行

きました。

その朝をきっかけに、終戦までの一と月の間、ほとんど一日も欠かさぬ艦載機の来襲に私の市はさらされたのですが、三日もたたぬうちに、私たちは危険が遠退いたことに気がつきました。市のはるか西方に陸軍の飛行場があり、それとは反対側の渺とした郊外の田圃をへだてた海辺に、大がかりな軍需工場があつて、それらが主な攻撃目標らしく、海の方からどえらい速力で走つて来た敵機は、最初の爆弾を工場地帯の上に降らし、そのまま低空を滑つて来て、市街の上空であたかものけぞつて踵を突っぱるように、くるりと身をひるがえして、ふたたび、工場めがけて舞い降りて行きました。あるいは呼吸をととのえるように二、三度大きく旋回してから、西の空へ消えて行く。いわば街の上空は、来襲機にとっては恰好の休息所みたいなもので、ときおり、敵機が立ち去つたあとの空中から、機関砲の葉莢がきらめきながらばらばらと降つて来ましたが、これはよほどの不運に魅入られない限り、いのちにかかわるほどの危険にはならないのです。

十日たつて、なにごともありませんでした。尤もビルの屋上から遠望すると、工場地帯の建物は半分以上消え失せていました。また、飛行場の格納庫は銃弾で蜂の巣同然になっているといふ噂も耳にしました。もっと身近かな悲惨なこと、たとえば工場の硫酸タンクが破られて、ほとぼり出た多量の硫酸が付近の防空壕へ流れ込み、中に入っていた二十数人の人間が、文字通り影も形もなく消えてなくなつたという話を、工場から逃げて来た人の口から直接聞いたりしました。しかし私たちの身辺には、一向に危険の迫る気配がなかった。それは、全く気味悪いほどでした。街には異様などかさが漂っていました。街の人たちはへんに胸苦しい退屈さをまぎらわそうと、ことさら陽気にふるまっているように見えました。中には、なかばやけくそになつて、こちらから危険に身

をすりよせて行くような行為に及ぶ者もありました。彼等は家の屋根や高い樹木のとっぺんによじ登って、惜しげもなく弾薬をまきちらすあの豪華な眺めをほしいままにし、その光景を自慢らしく地上の者に語ってきかせました。

空襲の時、私は離れの自室から、一步も出ないことにしていました。屋上の彼等は、血氣と好奇心から、危険とたわむれるスリルによってうつぶんを晴らしているとすれば、私は、多少の自虐趣味から危険を無視することで、それを冷笑しようと試みたわけでした。最初の不意打ちにはずいぶん狼狽こそしましたが、それが習慣になると、見張りの方も緊張し、やってくる時間の見当も大体ついたので、そんなにあわてる必要ありませんでした。敵機は大抵午前中にやって来ました。それから、たまには日没前に。空襲警報のサイレンが鳴ると、ホイキタサ、というような陽気なかけ声で、私たちは立ち上り、ある者は防空壕へ、ある者は近所の鉄筋ビルへ、そして私は離れの階段をぎしぎしと上って行くのです。

実は、私の部屋には、ちょっとした待避所が出来ていました。押入れの上段と下段の仕切棚の上に畳を二枚重ね、襖の外側に扉つきの本箱を、身体をねじ入れるほどの隙間をのこして、二つ並べたのです。天井は畳、側面を板で囲まれた押入れの下段は、ちょうど縁の下の穴倉といった感じでした。私はそこへ、机やら電気スタンドやら、そのほかこまごました日用品を持ち込んだので、何時間でも居つづけで大抵の用は足すことが出来ました。私はそこで、何ものに煩わされることもなく英語の本を読んだり、むつかしい幾何学の問題に定規をひねくりまわしたり、薬罐やかんの口に吸いついて水をのんだり、缺でつめを切ったりしました。空襲の間は、まわりの板を拳こぶしで叩いて拍子をとりながら、軍歌をひっきりなしに怒鳴るならわしでした。

その日も例によって、午前中に空襲がありました。ちょうど私は庭の隅の日陰で、しばらく朝顔の花をむしって、それを掌^{てのひら}にころがしてぼんやり見ているところでした。その時、空襲警報のサイレンが鳴りました。それは、全くいつもと同じ手口の空襲でした。強いて変ったところをあげるならば、不断より朝からひどく暑い日だった、というよりほかにない。

私は離れの方へ歩き出しながら空を仰ぐと、近所のビルが目につきました。それは強い太陽に足りつけられて、角砂糖をつみ重ねたみたいに、白くチカチカと輝いていました。行ってみようかな、と、ふと私は思いました。それからすぐ、行こう、東亜ビルへ行こうと胸の中で呟き、そのまま裏木戸を出て、ビルの方へ早足に歩き出したのです。これは全くわれながら思いがけない行動でした。この思いつきに、説明の仕様がなない。鉄筋コンクリートのビルの地下室は滅法涼しいし、防空壕よりは安全だというので、ちかごろ近所の人でにぎわっているという評判でした。ビルの中へ入ると、さすがにひんやりとし、地下室は噂にたがわず、二、三十人の人のざわめきにみちていました。

入口で、私は隣家のナオコに会いました。ナオコは私を見つめて、いやらしい顔をしました。

「とうとう、やって来たのね。」と彼女は言いました。

「今日は暑いからね。」

私は入口のほの暗い階段に腰を下ろしました。ナオコも私と並んで腰を下ろしながら、「押入れに入ってるんですって？」

私は少し笑って、それっきり二人して長いこと黙っていました。

地響きがするたびに、地下室の空気もかすかにふるえるようでした。上空を飛びまわっている爆

音は、蛇^{あぶ}の羽音のように、ある時は犬の唸り声のようにきこえました。ひととき大きな地響きがした時、天井から首筋にちりちり砂が降り、ナオコは身体をよせて私の腕を固くにぎりました。にぎったまま、空襲が終わるまで私にもたれかかるようにしていました。あたりが静かになって、私が立ち上ると、ナオコの手は私の腕を滑って、指にからみつきました。

「戦争がすんだら、ね。」とナオコはすわったまま仰向いて言いました。

「ああ。」と私は答えました。戦争が終わる前に死ぬことはわかっていましたから。

地下室を出て、目もくらむような白い光の中を、ゆっくり家の方へ歩きました。それから井戸端で手を洗っていると、裏の源さんが大股でやって来ました。

「やられましたね。」と源さんは私をみると言いました。「壕に入ったら、でかい音がしたんで、これはやられたなと思いました。でも、無事でよかった。」

私はコップで水をのみました。

「機関砲ですかね。」とまた源さんは言いました。私は源さんの顔色をうかがいました。

「爆弾でしょ、あれは。」

くそ面白くもないと、私がそう言いのかして離れの方へ歩いて行くと、源さんがあとからついて来ました。しかし源さんはもう五十すぎの米屋の番頭で、私の友人ではない。どうも様子がおかしく、私は離れの入口で振りむきました。私と源さんはちょっとの間、おたがいに顔色をさぐり合いました。

「油断は出来ませんな。いつどこでやられるか、わかったもんじゃありませんからな。やっぱり、逃げるべき時には逃げておいた方が無難ですよ。」